

海に生きる女たち

古川智恵子・中田明美

Women who Lead Sea Life

Chieko FURUKAWA and Akemi NAKATA

緒 言

伊勢湾は古くから東西の海上交通の重要な拠点であり、海産物の宝庫として知られている。この沿岸に住む人々は海に依存した生活を送っており、伊勢・志摩では現在も多く^{あま}の海女達が活躍している。

本報では、海女の系譜を探ると共に、荒海にもまれながらも自らの手で生きる糧をつかみとっている女たちの生きざまを記し、その衣服をも究明する事を目的とした。

方 法

1. 調査期間 昭和59年4月～62年3月

2. 調査地域 伊勢・志摩^{おうきつ}（相差・安乗・和具）

3. 調査方法

(1) 各地域の海女を訪問し、漁業着および作業の内容について聞きとりおよび写真撮影を行う。

(2) 図書館、各地資料館、教育委員会等を訪れ、文献や資料を収集する。

(3) 文献から得られた資料および現地調査の結果を併せ、海女の系譜および仕事着について究明し、海に生きる女たちの、くらしの一端を浮き彫りにする。

結果および考察

1. 海人（海女）の系譜

(1) 古代・中世の海人

日本は四方を海に囲まれており、古くから漁労を営んでいた事が推察される。中世頃までは「海女^{あま}」と書いて漁業を営む人々の事を総称したが、近世以降は潜水漁に携わる男を海士^{あま}、女を海女と称するようになった。

縄文時代には、貝塚からもわかるように、魚貝類を食料とし、海岸近くに住んだ者が多かった。これらの集落は海岸づたいに移動したと思われる。

弥生時代には漁法が改良され、網を用いる事によって漁獲量が増大し、漁労を専業にする者があらわれてくる。

日本についての最も古い記述がある3世紀の後半（弥生時代後期）に書かれた魏志倭人伝には、倭人が海に潜ってアワビや魚をとっていると記され、この頃既に海人のいた事が推察される。

志摩^{くさき}の国崎では現在も、のしアワビを伊勢神宮に献納しているが、これは垂仁天皇の御代（1世紀頃）に、伊勢に神宮をまつた時以来だという伝説がある。『倭姫命^{やまとひめのみこと}世紀^{せいき}』に、倭姫命が巡行している時、“おべん”という海女に出会い、命がこれを食べで大変美味であったため、天照大神の鎮座の地が決まったら献上するように、といて立ち去った。その約束によってアワビを献上するようになったという。

『万葉集』にも、伊勢・志摩の事を読んだ次のような句がある。

「伊勢の海の海人の島津が^{あはびたま}鰩玉取りて後もか恋のしげけむ」

（伊勢の海の海人の島津のアワビ玉は、手に取った後も、更に恋心がしきりとわく事であろうか）⁹⁾これは、恋心を真珠にたとえて、恋心を歌ったものである。

また、平城宮址の木簡（8世紀頃）に三河湾の篠島、佐久島の記述があり、赤魚、サメ等を供進していた事がわかる。これらは、潜るだけでなく、釣りによっても取ったと推察される。

これらの事から、6～7世紀には既に伊勢湾・三河湾の沿岸に多くの海人が魚類・アワビ、海藻等を採取していた事が明らかである。

9世紀に書かれた日本最初の辞書『和名抄』には海人の住む地名——海部——を持つ場所が17か所記され、伊勢湾・三河湾では紀伊（和歌山県）海部郡、尾張（愛知県）海部郡の二か所である。海部という地名がつくまでに相当の年数を要し、この頃より更に遡った時代から海人が生活を営んでいたであろう。

ここで、伊勢・志摩に海部の地名がみられないが、海部という郡・郷の人々は生産基盤として陸地の占有権も認められていたからであろう。従って漁民であると同時に、農民でもあったため、郷や郡をなしていたと考えられる。この事から、伊勢・志摩、三河湾の大半の海人が漁労を主とし、海に依存した生活を送っていた事が推察できる。

『延喜式』（927）によると、海産物の主な献納地として志摩があげられ、アワビを納めていた事がわかるが、アワビだけでなくナマコ、海草類もとっていたのであろう。

図1は、鎌倉時代の『伊勢新名所歌合絵巻』で三津湊の様子であるが、州浜には蛤がみえ、おしどりが遊泳し、風光明媚の所である。中央に漁民の家船らしい船が描かれており、この頃から家船の存在していた事がわかる。そして、これらの家船は三河湾にも散在していたと考えられ、伊勢神宮を中心に統一されていたのであろう。そうした漂泊を事とする海人達がアワビ、海藻等を取って暮らしをたてていたのである。

（2）近世の海人（海女）

近世初期においては、男の働きの方が主で、徒人^{かちど}と呼ばれる陸から潜る者が多く、伊勢・志摩の海人等は紀州へ海人稼ぎに出かけた。また男は紀州への海老網漁やカツオ釣、三河へのイワシ漁等出稼ぎに行く事が多くなり、この事が家船を解体させると同時に、女が家の近くで海で働かざるを得なくなった理由である。アワビやワカメ、テングサ等は海岸近くで採取でき、男が他へ出稼ぎに行くために、志摩では女だけが海で働いているように思われがちになった。



図1 三津湊(伊勢)「伊勢新名所歌合」
鎌倉時代

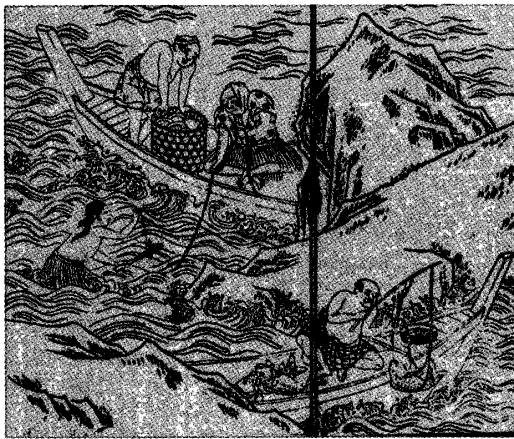


図2 海人「日本山海名産図会」江戸中期

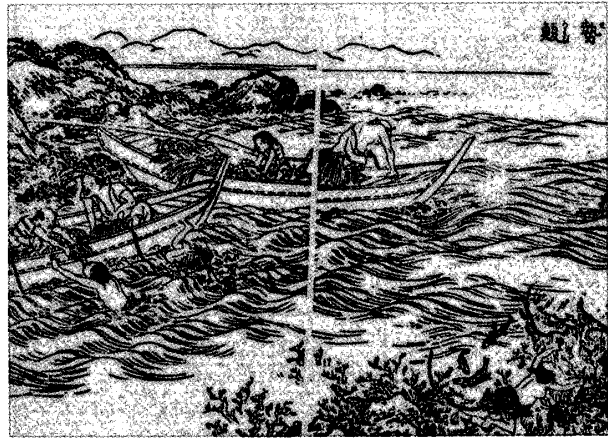


図3 伊勢の海女「日本山海名産図会」江戸中期



図4 江戸時代の海女(歌麿筆)



図5 明治時代の海女「三重県水産図解」

江戸時代中期以降には、長崎俵物の一つとして、メイホウ、ハイホウと称する乾鰯^{ほしあわび}を海外へ輸出しており、アワビの商品価値が上がって女の稼ぎは、ますます盛んとなる。

図2は、江戸時代中期の『日本山海名山図会』であるが、男の海士、女の海女が描かれている。男は筒袖のはんてんに腰みのをつけ、頭はほうかぶり、あるいは鉢巻きで鯛を釣っている。女は上半身裸で腰みのを着用している。

また、図3も『日本山海名産図会』であるが、伊勢の海女が描かれている。これは徒人に対して船人^{ふねど}といい、夫婦で船を沖へ出して作業をするものである。夫はトマエといい、船頭の役と、妻が浮上する際、竿をさし出して助ける役等、海女の補助を行うのである。トマエは常に水中をみつめ、浮かび上がる姿を見のがしてはならず、引き竿の上端が笠につかえないよう、夏でも笠を用いなかった。また、海女にもしもの事があった場合、いつでも飛びこめるように、身なりは軽装にしていたのである。海女の腰の綱は、これをつたって浮上するための命綱である。右下には海女の作業風景が描かれている。

図4は歌麿によって浮世絵として描かれた海女の姿である。赤い腰巻に上半身は裸であり、アワビを採取する際に用いる磯ノミをくわえている。志摩の海女は寛文年間(1661~1673)に

は、紀州や千葉方面の海にも出稼ぎに出かけたという。

(3) 近代の海女

図5は、明治16年に三重県の漁業を描いた『三重県水産図解』の海女である。右手前には漁の合間に暖をとり、仲間同志で談笑する海女の姿があり、左手前には徒人、左奥には船人が描かれている。

海女の潜水用具は、中世から明治初期頃まで殆ど変化がみられなかったが、明治24年(1891)頃から、二つ眼の磯眼鏡を用いるようになり、漁獲量が増大した。そのため、乱獲を恐れて一時使用を禁止したが、禁漁区の設定や採捕の時期を制限し、貝の養殖も行う等の対策がなされた。眼鏡に引き続いて船人が海底に潜る時間を早めるための分銅や、浮上する際に滑車を利用する等、潜水時間を延長させる工夫がなされ、この時代から近代化への歩みを見る事ができる。この頃の海女も出稼ぎに出かける者があり、遠くは朝鮮までも出かけていき、夏の間、船の上で生活した。

図6は大正初期の菅島の海女である。



図6 大正初期の海女(菅島)
(朝日新聞より)



図7 磯着の着装
(大正末～昭和43年まで)

上半身は裸で磯なかね(腰巻)を着用し、磯てぬぐいをかぶっている。腰巻の上端を外側へくるくると巻きこみ、潜水時に解けない着装の工夫がみられる。腰にはアワビをとる磯ノミをさしているが、熟練した海女は腰にノミの錆がこびりついていたという。それは、熟練者としての勲章であったのであろう。

海女達がシャツを着用し始めたのは、大正末期になってからで身体

の保護というよりも、裸は風俗上思わしくない、という気運が高まったためである。当時は各自が天竺木綿でシャツを縫い、貝ボタンをつけた。磯めがねも従来の二つ眼のものから、次に鼻出しめがねになり、昭和になって鼻までふさぐ一つ眼のものへと変化した。

(4) 現在の海女

1) 昭和43年(1968)まで

図7は大正末期～昭和43年(1968)頃までの海女の磯着の着装姿である。磯シャツに磯なかねを着用し、頭は鉢巻をして頭髪を整えてから、磯てぬぐいを巻く。海女の作業は常に危険がつきまとうために信仰心も強く、てぬぐいやノミに、セイマン(晴明判)、ドウマン(道満判)と呼ぶ呪符を黒や紺の糸でさしたり、イボニシという貝の臓器をつぶして染める等する。海女

は「ともかづき」妖怪を恐れる。これは、海中でかづいている（潜る）と、いつの間にか自分と同じ海女がかづいており、アワビをくれるというので手を出すと、そのまま深みに引きずりこまれてしまうという。「ともかづき」の磯てぬぐいには呪符がないので見わけの事ができる。図8に海女の磯着を、図9に補助衣を示す。

2) 昭和44年(1969)～現在

昭和44年(1969)から図10のように上・下とも黒のウェットスーツを着用し始め、白い磯シャツに磯なかねという情緒のある姿とは趣を異にしており、海女の仕事着においても近代化するわちアパレル産業の波が押し寄せている。図11にウェットスーツとその補助衣を示す。

ウェットスーツは厚さ5ミリ位で外がゴム、中がスポンジであり、潮が入っても摩擦で暖まる。水かきを着用するために作業能率は更に向上した。腰には、潜る時浮力を消すためのおもりをつける。一着2～3万円で体に合わせて作られ、破損した場合は専門の業者に依頼して修理をする。その他の作業用具は、磯眼鏡、磯ノミ、磯桶等、大きな変化はみられない。

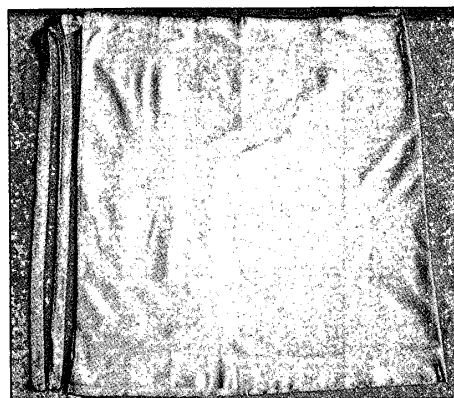
乱獲を恐れて、安乗や菅島等ではウェットスーツを着用しない地域もみられる。

2. 海女のくらし

女達の生活はどの地域においても決して楽なものではないが、伊勢・志摩においても例外ではなく、特に女の働きによって一家を支えるこの地方では、なみなみならぬものがある。



磯シャツ

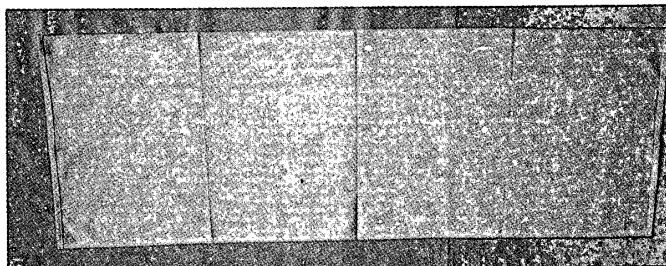


磯なかね

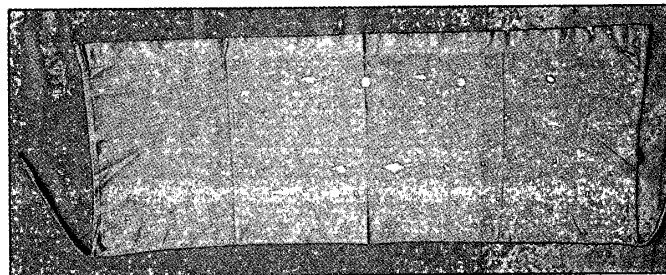
図8 海女の仕事着(大正末期～昭和43年まで)



はちまき

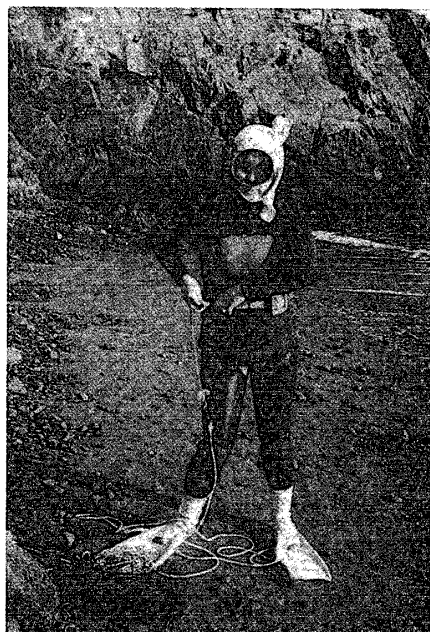


角まき

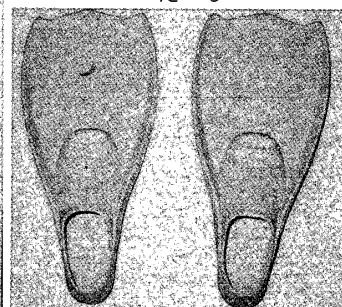


磯てぬぎ

図9 海女の仕事着(補助衣)



た び



ウエットスーツ上下

水かき

図10 現代の海女(昭和44年～現在)

図11 現代の海女の仕事着ウエットスーツ

女は幼少の頃から潜水のまねをし始め、母親や熟練した海女に潜り方を習う。稼ぎのいい海女は嫁のもらい手が多く、嫁入り道具として海女道具一式を持っていくのも、この土地ならではの。嫁入りしても1～2年は実家で暮らし、海女稼ぎをする。

45～50歳位になると、やっと熟練の海女として認められ、底甲斐性ができるという。60歳過ぎた者でも現役として冬でも大いに働いており、「テー（良人）一人ぐらいう養わん者はヤヤ（女）の値打ちがない」といわれるように、自分の腕に自信と誇りをもっている。

昔は生理の時も、妊娠中さえも海中の方が体が浮力で軽くなるので、産む間際まで潜っていたと聞き、女としてのたくましさを感じさせる。

アワビの口開けは3月15日であるが、3月に入るとすぐワカメ等を取り始め、貝の様子を見る。乱獲を防ぐために、潜る日や時間は漁業組合によって決められている。相差では、毎月7日、17日は休日と決め、また海で死んだ者があると、どんなに天気の良い日でも2日間休んで喪に服するといい、仲間を大切にする意識も強い。

海女には前述したように、自分で陸から泳いでいって作業する徒人と、夫婦で船を沖へ出して作業する船人がある。両者とも水中の作業であり、常に危険を伴うが、特に船人は二人の呼吸があわないと引き上げるタイミングを逸し、事故になりかねない。命綱を引くのが早すぎて綱が切れたり、息の止まった海女の水を吐かせる方法を知らない者は、そのまま女を死なせてしまう。磯を仕入れる（海の作業を習得させる）には、海女よりもトマエ（海女の補助をする夫のこと）を仕入れよ、とまでいわれた。

作業時間は午前九時～午後3時頃までで、夏は1回2時間位、冬は1時間位である。昔の磯シャツ、磯なかねの姿では冬は40分位が限度であった。

潜る時間は1回1分～1分30秒で、浮き上がってから息を3～5回して呼吸を整える。その時に「ヒューヒュー」と口笛（磯笛）を吹くが、こうすると呼吸が楽で回復も早いという。浜に響く磯笛は、海に生きる海女達の心意気が伝わってくるようである。採取物は、夏はアワビ

が多く、冬はこの他にナマコ、エビ、カニ、タコ等である。

作業の合間には海女小屋の中で火をたいて暖をとり、漁の自慢話に花を咲かせる。ここでさつま芋や餅を焼いて食べるが、厳しい作業に耐える海女達のつかの間の楽しみである。現在は図12のようにトタン屋根の小屋であるが、昔は竹で囲ってわらでふいた場所で火をたき、体を暖めた。外には作業着を干してあるが、安乗ではウェットスーツを禁じているため、セーターとトレーニングウェアを着用する。

海から上がると「潮とり」(タオル)で水けをふきとり、図13のように「上っぱり」に紺で作った「たなかね」(腰巻)を着用する。たなかねは夏は単衣、冬は袷仕立てにする。頭にはネルで作った角まきを巻く。図14にたなかねを示す。

作業着は綿の磯シャツ、磯なかねからウェットスーツへと移行したが、作業後は着脱のしやすい和服形式が根強く用いられている。

獲物は図15のように集荷場に集められ、漁業組合で札入れされてから業者の手に



図12 海女小屋 (安乗)



図13 海から上がった海女

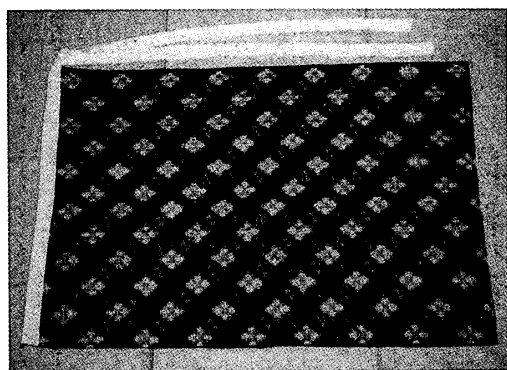


図14 たなかね

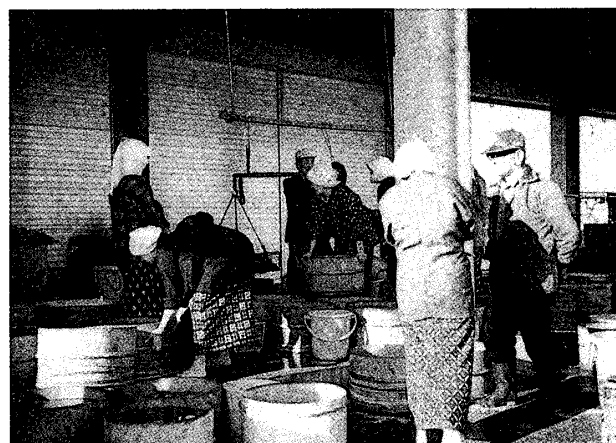


図15 集荷場 (相差)

渡る。収入は各々の甲斐性次第であり、組合から口座に振り込まれる。

作業を終えた海女は、海女道具を一輪車に積んで家路につくが、その表情には体一つで一家を支えているという自負と、仕事に対する満足感が満ちあふれている。

海女達は海での仕事の他にも、炊事、洗濯は勿論、生産活動が半農半漁であるため、畑仕事を行い、その後、浜に出かけていくのである。またその合間に子育ても行い、そのバイタリティには圧倒させられる。

要 約

日本は四方を海に囲まれ、人々は古くから漁労を営み、中世頃までは「海人」と書いて漁業を営む人々の事を総称したが、近世以降は潜水漁に携わる男を海士、女を海女と称するようになった。伊勢・志摩では奈良時代から海人のいた事が文献から散見される。当時は男も潜ったが、江戸時代から男が出稼ぎの漁に出た事や、アワビの価値が上がった事から、海女の働きが目立ってきたのである。

海女の仕事着は磯なかね（腰巻）に磯てぬぐいで、上半身は裸であった。サメが白を嫌うと信じられていた事から白が用いられた。明治初期頃まで殆ど変化はみられなかったが、磯眼鏡や、潜る時間を早める分銅、浮上を助ける滑車等、作業能率を向上させる工夫がなされ、大正時代末から磯シャツを着用した。この形態は昭和43年(1968)頃まで続くが、現在では保温性の高いウェットスーツへと移行した。

長い男社会の歴史の中で女の地位は常に低く、忍従を強いられ、最近ようやく男女平等が定着し、男女雇用機会均等法が施行された。しかし、伊勢・志摩では何千年もの間常に女が経済力を握り、男を養ってきた。男よりも女が生まれる事を喜び、女が家を建てるのは、あたりまえの事とされていた。海女達は理屈ではなく、経験の積み重ねによって底がいしょを体にたたきこみ、自分の腕一つで一家を支えている。生理の時も産み月さえも潜り、60～70歳の年齢までも、むしろ大海女（技量の優れた経験のある海女）として活躍しており、女としてのたくましさ、ひしひしと感ぜられる。

今回、海女の村を訪れ、「女は常に太陽であった」との平塚雷鳥の言葉通り、女は自信に満ち、光り輝いている。海での仕事の他にも家事、育児、畑仕事とめまぐるしく働き、そのバイタリティには圧倒させられる。それは無限の力を秘めた海から授かったものであろうか。伊勢・志摩には何千年もの間、奥深い海に抱かれ、海に命を預けた女達の魂が、今なお営々と生き続けている。

文 献

- 1) 宮本常一、川添 登：日本の海洋民，未来社（1974）
- 2) 大林太良：山民と海人，小学館（1985）
- 3) 森浩一：技術と民俗 上，小学館（1985）
- 4) 宮本常一：海に生きる人びと，11～36，86～96，未来社（1981）
- 5) 岩田隼一：志摩の海女，鳥羽志摩文化研究会長中村幸昭（1971）
- 6) 小松茂美：伊勢新名所歌合絵巻，81，中央公論社（1978）
- 7) 東海水産科学協会・海の博物館：三重県水産図解，250，東海水産科学協会・海の博物館（1984）
- 8) 薮関月：日本山海名産図会，名著刊行会（1969）
- 9) 桜井満：万葉集，旺文社（1984）
- 10) 森本孝：海の暮しとなりたち，ぎょうせい（1984）